

特別活動

望ましい人間関係づくりと よりよい集団活動のススメ

中学校学習指導要領において特別活動は、『集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」のための資質・能力を育成すること』を目標としています。

そのため、生徒一人一人が集団の一員としての自覚を深め、自ら考え判断し行動する力を育成することが重要です。

“特別活動の深い学び”をデザインする上で、2年次の発表に大きく関わる次の2つの視点について解説します。



県中教研 特別活動部 全県部長
新発田市立七葉中学校

校長 藤原 靖也

1 学級活動と学校行事・生徒会活動との相互関連付け

学級活動は、生徒が学校生活の課題を見だし、話し合いを通して解決策を考え、協力して実践する場であり、特別活動で育成を目指す「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」などは日常的な学級活動の中で培われます。しかし、学級活動・学校行事・生徒会活動がそれぞれ独立して行われるだけでは、生徒は活動の意義やつながりを十分に実感できません。そこで、これらの活動を相互に関連付け、学校生活全体を通して学びが循環するように指導することが重要となります。

例えば、体育祭や文化祭などの学校行事では、協力の大切さや役割を果たす意義を学ぶことができますが、その学びを一過性にしないためには行事後の振り返りが不可欠です。振り返りでは「成功の要因」「改善点」「今後への生かし方」などを考えさせることで、生徒は自らの成長や課題を自覚できます。体育祭で「学級内の連携不足」が課題として挙げられれば、学級活動でコミュニケーションや役割分担の工夫について話し合うことができま

す。また、文化祭で計画性の重要性を実感した場合には、その経験を学習計画や係活動の改善に結び付けられます。このように、行事で得た経験を学級活動で整理し、日常生活に生かすことで、課題発見・課題解決の力が育成されます。

さらに、生徒会活動との連携も欠かせません。生徒会活動は学校生活の向上を目指す自治的活動であり、社会参画の基礎を育む場です。生徒会の方針や重点目標を学級で共有し、「学級としてどう貢献するか」を話し合うことで、生徒は学校全体の課題を自分事として捉えられます。また、生徒総会や委員会で示された課題について学級で意見交換し、その意見を学校全体へ発信する機会を設けることで、民主的な合意形成の経験を積むことができます。

これらを効果的に進めるためには、学級活動・学校行事・生徒会活動の関連を明確にした年間指導計画を作成し、教職員が共通理解を図り、一貫した指導を行うことが求められます。

2 異学年交流や小中連携などの交流活動の充実

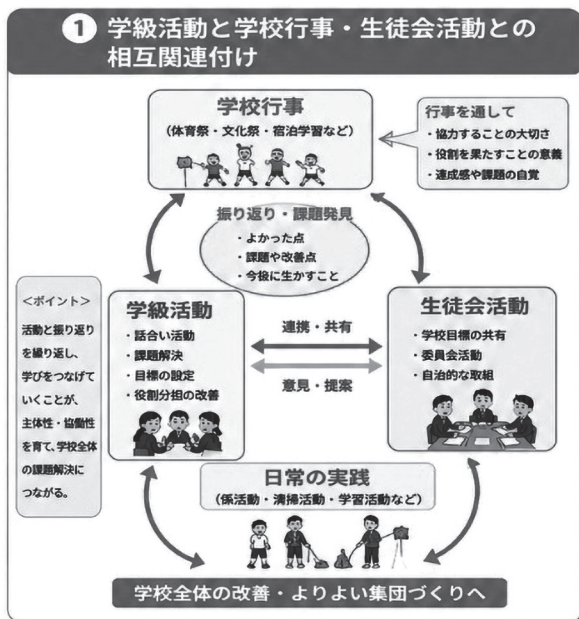
望ましい人間関係を形成するためには、同学年だけでなく、多様な年齢や立場の人々と関わる経験が重要です。異学年交流や小中連携は、生徒の他者理解や思いやりを育み、社会性や協働性を高める上で大きな意義をもちます。異学年交流の具体例として、縦割り班による清掃やレクリエーション活動、体育祭での縦割り応援団、文化祭での合同企画、学校生活オリエンテーションなどが挙げられます。これらの活動では、上級生が下級生を支援し、下級生が上級生の姿から学ぶという相互作用が生まれます。上級生はリーダーシップや責任感を身に付け、下級生は安心感や所属感を得ることができます。また、他者を支えたり感謝されたりする経験は、自己有用感の向上にもつながります。

小中連携も、児童生徒の円滑な接続を図る上で重要です。小中合同のあいさつ運動や清掃活動、中学生による読み聞かせや学習支援、小学生の部活動体験などは、互いの理解を深める機会となります。また、防災訓練や地域行事への合同参加は、地域社会とのつながり

を強める場となります。こうした活動を通して、小学生は中学校生活への期待や見通しをもち、中学生は年下の児童を支える立場としての責任感を育むことができます。

さらに、地域との連携も社会参画の視点から重要です。地域行事やボランティア活動への参加は、生徒が学校外の人々と関わり、社会の一員としての自覚を深める機会となります。特別活動で培われる協働する力や課題解決能力は、将来の社会生活でも不可欠な資質・能力です。

交流活動を充実させるためには、単発の取組で終わらず、年間を通して継続的・計画的に実施することが求められます。また、活動後には振り返りの機会を設け、自分の成長や課題、他者との関わりから学んだことを整理させることが重要です。こうした積み重ねが、生徒同士の信頼関係を深め、学校全体に温かな人間関係を築く基盤となります。そして、下級生の中に上級生への憧れが生まれ、それが学校のよき伝統として受け継がれていくのです。



特別活動 重点方針

望ましい人間関係を築き、集団や社会の一員として、よりよい集団生活を実現する生徒を育成する。

- 学校における集団活動や体験的な活動の一層の充実を図る。
- 自分の考えを発表したり、他と交流したりしながら、考えを広げたり、深めたりする場を設定する。

特別活動 <上越地区／上越市中教研>

11月25日(水) 研究会開催

研究主題：少人数の利点を生かした生徒一人一人が主役
の授業、教育活動の実践
～全校、縦割り異学年交流を主軸にした
特別活動の展開～

単 元 名：「いじめ見逃しゼロスクール集会」

会 場 校：上越市立潮陵中学校

公 開：全学級

授 業 者：藤巻 舞香・船崎 毅

指 導 者：上越教育大学 教授 阿部 隆幸 様



研究推進責任者
上越市立城北中学校
高橋 沙友里



教科・領域担当者
上越市立潮陵中学校
藤巻 舞香

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

異学年交流での学習活動を継続して行うことによって、悩んだり、困難を感じたりする場面でも、仲間と協力し自分の力で未来を切り拓いていく姿を目指します。生徒は積極的に自らの役割を果たし、集団でしか得られない達成感や自己有用感を育むことができます。安心して話し合い活動を進めることができる雰囲気をつくり、相手に自分の本音を伝えられる一歩踏み込んだ人間関係形成をすることで集団の学びを深めていきます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3・8）

視点・論点を設定し、グループで意見交換を行うことで自分と他者の意見の類似点や相違点を整理する。

これにより、生徒は同じ事象でも見え方や感じ方が異なることに気づき、多様な見方ができるようになる。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

他者に対して自分の考えを理由や根拠を示して論理的に説明することで、本音を伝え合う活動を組織する。

これにより、生徒は互いの考えを積極的に伝え合うことができるようになり、一歩踏み込んだ意見が伝えられるようになる。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.15）

思考ツールを使用し、意見をまとめた後、他者と自分の考えを比較しながら自分の言葉で学びを整理しまとめる。

これにより、グループの意見の共有化が容易になり、自分と他者との思いを視覚化し、理解を深めることで、自分の考えを再構築できるようになる。

単元（題材）の様子

年間を通して小中交流だけでなく、中学校での異学年交流による授業実践を行います。意見交流できる「課題設定」をし、話し合いの視点を「焦点化」することで自分や他者の捉え方の違いを知ることができます。

これにより、一人一人の捉え方には違いがあって当たり前であるという意識と、安心して意見を伝え合う雰囲気の醸成をしていきます。

ポイント1

月	内容	形態
7月	全校道徳	異学年交流
9月	全校キャリア教育	異学年交流
9月	避難訓練	小中交流
10月	魚の森づくり活動	小中交流
10月	文化祭	小中交流
11月	いじめ見逃しゼロスクール集会	小中交流

一人一人に役割がある、話し合い活動を継続的に実施します。全校道徳や全校キャリア教育の場面では、3年生がリーダーとなり積極的に班員に声をかけ、話し合い活動を進める姿を目指します。下級生は安心して自分の意見を伝える経験を増やし、本音を伝えやすい雰囲気づくりを進めます。

これにより、責任をもって自分の役割を果たすようになり、お互いが支えあい、安心して活動を進めることができる関係を築くことができます。

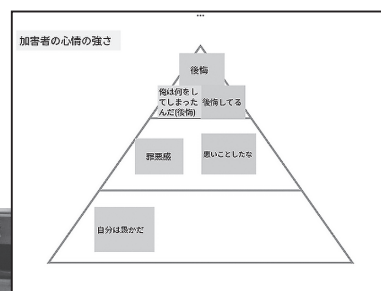
ポイント2



タブレットで思考ツールが使用できるアプリを活用し、自分の意見や班員の意見を比較し、意見交流を進めます。ICTを活用することで、複数人の多様な意見を一覧で確認することができ、次の対話へ発展させることが容易になります。さらに、振り返りの際にも、手元で思考ツールを確認しながら、自分の考えを見つめ直すことも可能になり、自分の考えの変容や深まりを実感できるようにします。

ポイント2

ポイント3



研究会

小中合同の「いじめ見逃しゼロスクール集会」を実施します。小学校5、6年生と中学生を交えた少人数グループでの話し合い活動を行います。小学生も含めて、一歩踏み込んだ本音での話し合い活動ができるようにします。

アイスブレイクから、中学生のリーダー、フォロワーが協力し温かい雰囲気をつくり、互いの意見を取り入れ、生徒自身が意見の視覚化や焦点を絞っての話し合いを進めることができる姿を目指します。

ポイント1・2・3



話し合い活動後に、振り返り活動を継続して実施し、自己の成長を感じる機会を設けるとともに、他者との関わりから学んだことを、今後の生活や社会活動の中で実践していこうとする姿を目指します。

特別活動 <新潟地区／新潟市中教研>

10月22日(木) 研究会開催

研究主題：「よりよい人間関係を育む学年・学級経営の工夫」

～他との関わりを必要とする

活動を中心として～

単 元 名：「学級力向上プロジェクト」

会 場 校：新潟市立葛塚中学校

公 開：各学年1学級

授 業 者：弦弓 健太・羽二生 翔・渡邊 萌子

指 導 者：愛知教育大学 准教授 磯部 征尊 様



研究推進責任者
新潟市立藤見中学校
栗原 静奈



教科・領域担当者
新潟市立葛塚中学校
渡邊 萌子

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

今の学級の課題を自分たちで捉え、解決に向けてアクションを起こす姿を目指します。そのために、学級生活の様子を複数の観点から捉え、学級のよさや課題を可視化する「学級力アンケート」を活用します。自分たちが目指す理想の学級像と結果を照らし合わせ、学級の現状や改善すべき課題を共有します。そして、教育課程全体で「対話」を大切にする風土を育み、学級活動においても、よりよい学級づくりに向けて主体的・対話的に意思決定や合意形成を行います。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

「学級力アンケート」によって、自クラスの課題を明らかにして、高めたい力を設定する。

クラスの現状を可視化することで、理想の学級とのギャップを認識し、解決に向けた見通しをもっていきます。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.10）

課題解決に向けた取り組みを合意形成していく。

同じ目的をもった生徒がそれぞれに考えをもち、それらを「出し合う」「比べる」「まとめる」過程の中で、豊かに対話をし、こだわりをもって解決に向かっていきます。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.20）

生徒一人ひとりの、生徒－教師間の価値付けにより、自身や学級の成長を実感する。

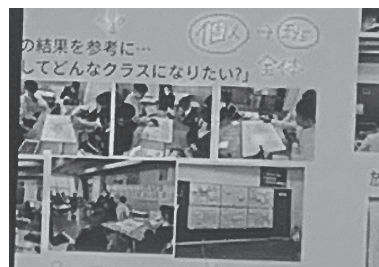
行事を通じた成長を実感し、それらをいかに日常に生かすのかを考えるとともに、次なる課題を解決するために新たな見通しをもたせていきます。

単元（題材）の様子

生徒が自ら課題を発見し、それを自分事として捉えるために「学級力アンケート」を行います。

これにより、生徒が客観的に自クラスの状況を捉え、行事を通してどんな力を伸ばしていきたいかを考えることができるようになります。

ポイント1



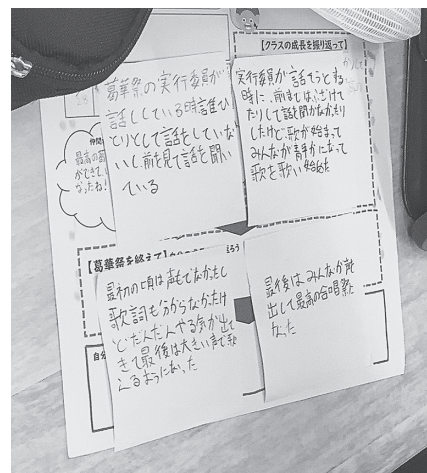
ポイント1で明確化された自クラスの課題の解決に向けた取組を考えます。考えを「出し合う」場面ではアクションカードなどを用い、「比べる」「まとめる」場面では合意形成マニュアルなどを用いて、考えの根底にある理由を大切にしながら、よりよいものを合意形成していきます。学年により差はあれど、教師は伴走者として生徒—生徒間の対話や、生徒自身のファシリテーションが円滑に進むようにサポートしていきます。

ポイント2



生徒が行事当日や、そこまでの過程（自分たちで決めた取組を含む）の中で、課題解決ができたのか、どんな成長ができたのかを振り返ります。教師からの価値付けだけでなく、写真などの事実を基にしながら生徒—生徒間の価値付けを通して、成長の実感を促します。そして、それらが日常にどう生きていくのか、次なる課題は何なのかに目を向けていきます。このサイクルを繰り返すことで、生徒の自己肯定感と主体的に課題解決に向けて進んでいく資質能力を育みます。

ポイント3



研究会

当日は体育祭を終えて、合唱発表会の成功に向けた取組を合意形成していく場面を公開する予定です。生徒が体育祭後の日常生活の中で出てきた課題を明確にしながら、学級力向上（行事の成功）のために、全員が納得のいく取組とその運営のためのシステムを決めていきます。



ポイント1・2・3

